

Title	民芸運動の中の女性
Author(s)	小野, 絢子
Citation	文化/批評. 2012, 4, p. 115-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75775
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

民芸運動の中の女性

小野絢子

はじめに

大正 14(1925) 年、当時白樺派の同人だった柳宗悦、陶芸家の濱田庄司、河井寛次郎により、「民芸」という言葉が創り出された。「民芸」とは、「民衆的工芸」の略であり、美術品だけではなく、民衆が民衆の為に作った普段使いの品々の中に美をみとめるという思想である。柳による、民芸の美の特徴は、「一般民衆の生活のために作られること」、「実用を第一の目的とすること」、「大量生産されること」、「低価格であること」、「職人によって製作されること」[柳 1985:85]などをあげることができる。

こうした新しい美の視点を発見した柳宗悦とは、元々は雑誌『白樺』にて西洋美術の紹介を行っていた人物だった。明治 43(1910)年に帝国大学に入学した柳は、卒業論文として「心理学は純粋科学たり得るや」をおさめ、のちに同志ともなる寿岳文章と共にウィリアム・ブレイクに関する研究を行うなど、西洋に関心を持っていた。しかしその柳の関心が、西洋から東洋へ移り変わるのは、大正 3(1914)年に、朝鮮との関わりを経てからである。大正 3年、朝鮮から訪れた浅川伯教が手土産に持ってきた染付秋草文面取壺と出会い、朝鮮の白磁に魅了された柳は、その後、何度も朝鮮を訪れ、大正 12(1923)年には、現在のソウル京福宮内緝敬堂内に「朝鮮民族美術館」を浅川兄弟と協力して開設した。そこに収められたのは、白磁の他、朝鮮の人々が当時の生活の中で用いていた品々である。柳の東洋に対する関心は更に強くなり、これ以降その眼差しは日本に向けられていくこととなる。

特に柳の眼が、取り上げていったのは、朝鮮の場合と同じくこれまで美的価値を認められてこなかった地方の手工芸品などだった。当時において、柳らが注目した品物は「雑器」などと呼ばれていたが、柳らはこれに新しい呼び名をつけた。それが、冒頭に紹介した「民芸」である。こうした柳宗悦および民芸の思想に関する研究は、現在でも民芸の研究においてメインストリームとなっている部分である。柳については、水尾比呂志による、生涯から人物像までを網羅的に纏めたものがある[水尾 2004]。民芸の思想については、思想史から鶴見俊輔[鶴見 1976]、カルチュラル・スタディーズの観点から竹中均[竹中 1999]などによってまとめられており、松井健によって、その理論の現在の意義の問い直しも行われている[松井 2005]。

そして、柳により見出された民芸という新たな美への眼差しと、それによって再評価さ

れた品々を世間に普及させるべく、濱田、河井、富本憲吉らを初期メンバーとして展開していったのが、「民芸運動」である。運動のはじまりは、現在の研究では「日本民藝美術館設立趣意書」が発表された1926(昭和元)年とされており[濱田2003]、1928(昭和3)年、御大札記念国産振興博覧会に「民藝館」が出品される。1936年には東京駒場に日本民藝館が開設された。「民芸品の収集、保存」、「民芸に関する調査研究」、「民芸思想の普及」、「展覧会」を主な活動目的とする日本民藝館は、現在でも運動の拠点となっている場所である。この間にも、柳ら運動の同人は日本各地への窯場をはじめとした生産地へ足を運び、品物の収集はもちろん、生産品の指導などを行ってきた。そんな中、1940年に沖縄に滞在した際に「沖縄言語問題論争」が起こる。この時の柳達、民芸運動側は、「沖縄の言語にかつての純粋な日本が残っている」[竹中1999]と主張して、沖縄方言の保護を訴えたが、県庁はもちろん現地住民からも容易く受け入れられた訳では無かった。「柳の沖縄観に対しては、＜純粋な＞沖縄文化を守ろうとしたヒューマニズムを好意的に評価する人々がいる一方で、優位な立場にある観察者がかわいそうなマイノリティ文化を保護すべきものとして見下しているのではないか」[竹中1999:118]として、現在の研究でも批判的意見的となっている。

運動の同人達は、沖縄をはじめとした日本各地の他、国外にも出かけて新たな民芸品を探索し、主に日本において産地での指導を行った。こうした民芸運動は、都市部を中心にすでに消滅の途上にあった雑器を、民芸として価値付けることですくい取っていった運動であり[濱田2003:128]、運動によって美的価値を見出された品物は、実際に用途を変換しながら地方から中央へと持ち込まれていった。さらに、運動のもう一つの重要な目的は、民芸の品物を用いて当時の生活の変革を目指すことでもあった。

民芸運動がその展開のために採用した展示手法を、金谷は「モデルルーム式展示」「物産展式展示」「美的展示」の3つの形態に分類した[金谷1996:84]。それによれば、民芸運動の展示は、物の本来の文脈における用途や意味を剥奪し、見る者に所有可能な物、所有することによって差異をつけることのできる記号として提示したと指摘した。

このように、民芸運動の研究史は思想史や工芸の分野に関したものの、あるいは柳の言説分析を中心とした研究が中心となってきたものであり、運動の実践的側面を実証的に明らかにした研究は少ない[濱田2003:285]。

以上の民芸運動には女性も関わり、その存在は何度となく意識されていた。例えば、昭和14(1939)年8月『月刊民藝』第5号にて掲載された「民藝を語る」という座談会がある。民芸運動の活動家だった寿岳文章とその妻である、英文学者の寿岳しづ(静子)、式場隆三郎が参加したこの座談会の議題の一つに、「婦人と民芸運動」、「女の人に民藝を理解さ

せたい」という項目がある。さらに、昭和17年1月発行『民藝』33号には、中村精により「婦人と工藝教育—女学校の工藝を中心として—」と題された文章が寄せられている。この論文では、主に女性への民芸の理解の方法が模索されており、特に女学校においてどのように民芸を教育するかが論じられている。「婦人と工藝ほど関係の深いものはない。衣・食・住の各方面に於いて、婦人たちは日々何人よりも直接に、衣服・食器・家具などの各種の工芸品と結びついた生活をし、また、おそらくこれらを選択したり、買入れたりする場合にも、主としてこれに当るのは婦人たちである。(中略)これほど重要な事柄であるにも拘らず、従来我が国の女子教育の中に於いて、工藝に関する教育は余り重要視されてゐなかつたのである」[中村 1942:30]。このように述べた中村は、さらに先で「普通一般の女子教育の場合には、わたくしは民藝を基調として行ふべきことを提唱したい」[中村 1942:33]としている。他にも女性について言及した文章としては、昭和14年9月発行の『月刊民藝』6号掲載の寿岳しづによる「髪かたち」[寿岳しづ 1939:46]、昭和14年10月発行『民藝』7号掲載の田川きよ子による「生活者の立場と民藝品」[田川 1939:9-10]、昭和14年10月発行『月刊民藝』7号掲載の柳悦孝による「現代の女の服装と国民服」[柳 1939:40]などがある。

このように、民芸運動の中心部において少なからず意識されていた女性ではあるが、これまでの先行研究ではほとんど言及がされることなく、その内容も柳宗悦の妻である柳兼子や著名な運動家達の妻や関係者に偏っている。例えば、小池静子による『柳宗悦を支えて——声楽と民藝の母・柳兼子の生涯』は、柳兼子の教えを受けた著者によって彼女の生涯が詳細に纏められたものである。この著書によって示された、民芸運動の同人の妻としての姿は、本稿にとっても重要な意義をもつものと考えられる。また、運動の中で、特別な立場をもたない、それ以外の女性についての数少ない研究の一つに、大澤美樹子、清水明子、原聖によってまとめられた報告がある。この研究では、女子美術大学の工芸科に教員として村岡景夫、園池公巧、芹沢銈介、柳宗悦、柳悦孝が関わっていたことを明らかにした。彼らは、女子美術専門学校が、昭和24(1949)年に短期大学を設置する際に採用されたようである。つまり、ここで民芸運動の中核を担った人物達が、実際に教育の場で教鞭を取っていたことが示されたと言える[大澤・清水・原 2006]。

しかし、上記の研究も、運動家達の動向を調査したものであり、受け手となる側の女性達がどのように民芸運動や民芸の思想と関わって来たのかについては明らかではない。さらに、民芸運動が取り上げた品々は元々が日常の品物であり、さらに運動はそれらを生活の中に取り入れることを提唱していた。こうした日常品を実際に選び購入し、もともと身近に使うのは、他でもない家事を行う女性達なのである。したがって、本研究では、運動

の受け手となり、その展開を支えた女性達について、実際の聞き取り調査を基に考察を試みることにする。

本稿において考察の対象とするのは、岡山県倉敷市の事例である。倉敷市は東京駒場にある日本民藝館に次いで、二番目に民芸館が設立された場所になる。さらに、日本民藝館を建設する際に、柳の思想に賛同し多くの出資金を出した大原孫三郎の拠点もこの倉敷市にある。したがって、岡山県倉敷市は、地方における民芸運動の先駆けとなった場所であると考えられる。さらに、この場所で民芸運動の普及を行った外村吉之介は、当時の運動の中ではかなり早い段階で女性に対して实际的な働きかけを行った人物である。その活動の代表的な例は、岡山県倉敷市に設立された、未婚の女性を対象とした織物の学校の他、公民館などを用いて、地域の女性達に民芸の思想を軸とした教室、外村本人が働きかけを行って結成された女性達による物づくりのグループなどがある。これらの事例は、のちに聞き取り調査の報告と共に、詳しく考察を試みることにする。こうした外村についての先行研究は、神田健次によるものをあげることができる。神田は、その活動をキリスト教を背景とした視点から論じている。神田によれば、外村の関心は「民芸とキリスト教の関係を内的に深く統合して理解し、実践すること」であり、つまり外村にとってキリスト教の伝道者としての働きと、機織の職人としての働きが不可分であったと指摘している〔神田2001:64〕。

本稿の目標は、外村吉之介が女性に対してどのような働きかけを行ったか、そして彼の普及活動を受けて民芸運動と関わることになった女性達が、それをどのように受け止めていたかについて聞き取り調査にもとづいて明らかにする。そして、外村吉之介が、彼の活動を通して女性達になにを期待していたのかについて考察を試みる。

1. 岡山県下の民芸運動

1-1. 外村吉之介の生い立ち

岡山県で民芸運動を展開した主な人物として、大原孫三郎、總一郎親子と外村吉之介らを挙げることができる。本稿では、彼らの中でも外村吉之介が展開した活動を見ていくことにする。なぜなら外村は、民芸運動が進められていく中でも早いうちから、女性に対しての活動を独自のスタイルを用いて積極的に行った人物だと考えられるためである。まずは、外村の生い立ちについて述べておこう。

明治31(1898)年、滋賀県で生まれた外村吉之介は、大正2(1913)年頃にキリスト教会にて洗礼を受けた。大正10(1921)年、22歳で関西学院大学神学部に入學し、卒業後は京都にて京都基督教青年会(YMCA)において幹部主事を勤めた。その中で柳宗悦の『工藝の

道』に出会い感銘を受け、民芸運動に参加していく。

昭和7(1918)年には、柳悦孝と共に浜松の工房に入門し、機織の技術を学んだ。さらに浜松の西ヶ崎に工房と教会を持った後、昭和9(1934)年、静岡県袋井町に移り、柳悦孝と共に葛布製作の仕事に携わる。この葛布は、日本民藝館の壁紙にも採用され、昭和10(1935)年に『葛布帖』が出版された。その後、昭和21(1946)年、大原總一郎に招かれ倉敷に移住する。そして大原と共に、昭和21年、岡山県民藝協会を発足した。昭和23(1948)年に倉敷民藝館が設立されると、館長に就任した。昭和28(1953)年には「倉敷本染手織研究所」を設立する。昭和40(1965)年、熊本国際民藝館を設立し、こちらでも館長に就任した。昭和48(1973)年には「日本民藝夏期学校」の創始に携わった。他にも全国各地で講演や講習など様々な活動を行い、平成5(1993)年に逝去した。

1-2. 倉敷民藝館の設立と展開

外村の活動拠点となった倉敷で民芸運動が本格化したのは、戦後間もない昭和20年代だった。昭和21(1946)年、現在の株式会社クラレである、倉敷絹織および倉敷紡績の社長であった大原總一郎が初代会長となり、幹事に外村吉之介が選ばれ、「岡山県民藝協会」が設立された。これが、岡山県における民芸運動の中心となる組織である。翌年の昭和22(1947)年からは『岡山県民藝協会会報』が刊行され、『岡山県民藝協会規約』が掲載されると共に、同会の会員募集も開始された。この規約には、協会が日本民藝館を中心に、柳の提唱した理念に従い、次の事業を行うと記されている。それは、「イ、工藝品の調査、収集、展覧、指導」「ロ、出版、民家の写真撮影」「ハ、集会、講演、映畫」「ニ、地方民藝館の創設」「ホ、工藝伝習所、圖案指導所等の開設」「ヘ、工藝品の売店経営」[岡山県民藝協会1947:2]の6項目である。

また、同年は大原などの尽力によって、「岡山県民藝振興株式会社」も発足した。翌年、『岡山県民藝協会会報』は、この年に刊行された第5号より、現在の『山陽民藝』と名称を改める。その第5号には、「倉敷民藝館設立趣意書」が掲載され、さらに「倉敷民藝館建設趣旨」と題された広告が全国に配布された¹⁾。これらの記事によると、民芸館の開設は地方民芸運動の拠点として、「地方文化の為に、必要にして急をようするもの」と考えられていた。

そして、昭和23(1948)年11月15日、外村が初代館長となり、東京の日本民藝館に次ぐ2番目の民芸館として、倉敷民藝館が開館した。場所は現在の倉敷美観地区内で、建物は大原家の米蔵を改装したものだ。当初は1号館のみの公開が予定されていたが、2号館、3号館、4号館も未完成な部分を残しながらも開館日には無事公開された。

翌年1月5日からは、一般公開が行われた。倉敷民藝館の当時の入館料は、昭和24年の「倉敷民藝館観覧規定」によれば、「普通15円 学生10円 学生団体5円」であり、岡山県民藝協会会員は本人のみ観覧無料となった〔岡山県民藝協会1949:3〕。当初の所蔵品は、昭和24年12月の時点で、賛助出品345点に加えて、外村・大原などによる収集品によって構成された〔岡山県民藝協会1949:3〕。

昭和26(1951)年には、倉敷民藝館は母体である岡山民藝協会から独立して財団法人となった。5月初旬になると、開館時から改装工事の残っていた4号館と2号館半分の工事が始まり、9月中旬に完成した。この改装工事では、2号館の改築の他に、4号館の奥に畳の部屋が設けられた。この部屋は、収集した民芸品を再び生活の場に戻し、美しい生活を表現するためのモデルルームとして設計されたものである。改装工事はこの後も何度か行われ、新館一階に移されたモデルルームは、現在「いろりの間」と呼ばれている。昭和27(1952)年に博物館法が施行された際、民芸館は博物館相当施設と指定された。

2. 民芸運動の実践者としての女性

2-1. 女性に伝える「民芸」

ここからは、外村によって行われた、女性を主なターゲットとした活動を見ていく。まずその一つが昭和30(1955)年、倉敷において、岡山県民藝協会が主催で開催した第1期「民藝女性教室」である。「民藝女性教室」は、「生活の美しさの探求」を趣旨とする教室であり、第1期は昭和30年9月より6ヶ月間、毎週第3土曜日の午後1時から行われた。満18歳以上の女性を対象とし、定員は30名だった。第1期の講師は広島大学工学部教授・佐藤重夫と倉敷民藝館館長・外村吉之介の2名が務め、それぞれ講義と見学会を行った。その後も、講師は外村と他数名により構成された。講義、見学、実技の内容は講師毎に多様であったが、外村は必ず講義で民芸美論を説き、倉敷民藝館の見学も毎回行った。実習では、回により違いはあるが、刺子の作成が多かった。

この民藝女性教室は、昭和30年の第1期から38(1963)年の第9期まで、8年間の間9回に渡って行われ、参加者も30名から60名以上に及んでいる。さらに昭和32年、陶芸家である濱田庄司が岡山を訪れた際には、濱田を講師に招き、第1期からの聴講生全てを対象とした「民藝女性教室特別集会」が開催された。

また、民藝女性教室の門戸を広げる目的で、昭和34(1959)年に「民藝成人教室」が行われた。内容は女性教室とそれほど変わらず、実技では刺子と軸掛けが行われた。この教室は、女性以外も対象者を広げるため「民藝成人教室」と題して行われたが、実際のところ参加者37名中、男性は6名のみだった。

その後昭和 48(1973)年、西条・倉敷・阿蘇・出雲・富山の民芸協会が主催となって、初めての「日本民藝青年夏季学校」が開催された。これは、外村が、柳宗悦の死後、当時の富山民藝協会の水木省三に後継者育成の責任を果たすよう要請されて、開催したものである。「日本民藝青年夏期学校」は、2回目より外村の意向で日本民藝協会主催という形になり、現在まで続いている。

名称は「青年」とされているものの、参加者は女性が半数以上を占めた。これについて水尾は、「夏期学校の生徒に女性が多いというお話ですが、暮しということを考えますと、女性の民芸運動における役割は大きい」[水尾・外村他 1978:6]と述べている。しかし、これは民芸運動の普及のために、女性の価値が再度見直されているということに過ぎないとも読むことができる。さらに、「日本民藝青年夏期」という名称により、女性をはじめ、青年という言葉に該当しない人達が参加し難いということが問題視され、昭和 54 年 (1979) 年に「日本民藝夏期学校」と名称が改められた。夏期学校は、現在でも日本各地から 3 か所を会場として選んで、毎年行われている。

2-2. 「民芸」の実践

続いて、より実践的に女性達に向けて行われた活動について見ていくことにしよう。

昭和 28(1953)年に倉敷民藝館正面の外村自身の自宅を教室として、「倉敷民藝館付属工藝研究所」が設立された。講師は、外村吉之介とその妻である外村清子が務めた。研究所の期間は春から 1 年間。研究生の多くが外村の自宅に住み込み、外村夫妻と生活を共にしながら、織物の織り方や民芸の思想について学んだ。

研究生達が何が望まれていたかについては、岡山県民藝協会の機関誌である『山陽民藝』に掲載された研究生募集の記事から見ていきたい。まず記事のタイトルは「手織物傳習案内」と題され、趣旨として、「此頃の社会が大変騒々しく見える大きな原因の一つは、世人の衣服の材料や色彩が浅薄だからである。衣服の生地を手づから染織することによって生活を正しく美しくし社会の文度を高めなければならない。私共は二十数年来の織物研究と実技とをここに残りなく公開して世に普及したいと希ふものである」[岡山県民藝協会 1953:4]と記されている。研究生の対象は中学生以上の健康な女子であると共に、未婚であることも条件の一つとされた。内容は木綿絹、ウールによる手織物の制作、草木染の染色方法や民芸の思想についてである。一年間の修業期間の費用は、伝習費として 3000 円と各自の生活費である。寄宿卒業生には特典として卒業後織機一台が贈与された。また、研究生としての 1 年が終わった後、多くはその年の卒業生 1 人が外村夫妻の助手として、再び 1 年間住み込みまたは通いで研究所に残った。

昭和28年の第1期は7名の女性が研究生として集い、翌年の第2期は3名、昭和30年の第3期は2名と、初期は5名以内の規模で続く。しかし、昭和33(1958)年の第6期以降は規模を拡大し、毎回5名から8名で続けられた。昭和52(1977)年には現在の「倉敷本染手織研究所」と名称を改め、外村がこの世を去る平成5(1993)年までの40年間の間で、200名以上の女性が研究生として学び卒業していった。

外村が逝去した平成5年に研究所は一度休止したものの、翌年の平成6(1994)年からの2年間は、妻である外村清子が続けた。平成8(1996)年に外村清子が逝去した後は、翌年からその息子夫妻が後を受け継ぎ、現在も続いている。

研究生は卒業後、「倉敷本染手織研究所」の同窓生で組織される「倉敷本染手織会」に入る。この会は昭和32年に同窓会として設立されたものである。「倉敷本染手織研究所」で織物などを学んだ研究生の交流と勉強を援助するもので、作品を販売するため流通の確保も行っている。現在でも、年数回展示会を開催している。

次に、外村が指導を行った「倉敷手まり会」について説明する。「倉敷手まり会」については、メンバーである、岡山県在住Hさん(1934生)、Kさん(1933生)、M(1937生)さんに話を伺うことができた。以下、「倉敷手まり」について、私が伺った話を基に記していきたい²⁾。

外村は、岡山人芸協会主催で行われた「民芸女性教室」の他に、水島、倉敷、岡山の三ヶ所の公民館で、地域の女性達を対象とした教室を開いていた。このうち、倉敷の公民館では昭和45(1970)年から2年間にわたり、「家庭の中の民芸」という教室を毎週1回行っていた。この教室は、公民館活動の社会教育の一環として公民館側で募集が行われ、地域の主婦達30～40人が集まった。講義は、柳宗悦の『工藝文化』と『工藝の道』を教科書として外村が行った。実習は七宝編み、パッチワーク、籐の籠造り、ベンガラ染め、板締め、刺し子などで、講師はその都度違ったようである。この倉敷本町の教室は、公民館側での期間が終了した後も、教室に参加していた女性達自身がグループを作り、公民館を借りて、そこに外村を招く形で続けられた。

この教室に参加していた女性達が民芸の思想や民芸品について興味を持ち、自分達で物作りをしたいと考え結成したのが、現在の「倉敷手まり会」である。

最初のきっかけは、昭和47(1972)年頃、教室で行われた熊本旅行だった。教室の女性達は、その旅行で当時外村が館長を勤めていた熊本国際民芸館に立ち寄り、熊本の女性達が作る肥後まりに出会った。これを見た外村は、「君達もこういうのを作ってみたいか？」という事を、現在の「倉敷手まり会」メンバーであるHさんをはじめとする教室受講生の女性達に尋ねた。この一言を受けた教室の女性達のうち、その年の教室の運営当番で

あった7～8人が発起し、Hさん宅を仕事場に、まり作りが始められた。

まり作りは、すべて一から手探りの状態で始められ、最初は芯にストッキングの切れ端を使っていた。しかし、外村からの指導を受け、県内でまり作りをしているちりめん教室の講師に尋ねる等、様々な試行錯誤を繰り返した。模様は肥後まりを基にして作ってはいるが、出来上がったものを外村に見せて、外村が褒めたものだけを基本として、そこから色を変えるなどしてバリエーションをつけていった。こうして女性達によって作られた手まりは、昭和60(1985)年、日本民藝協会の全国大会の際、初めて商品として世の中に送り出された。当初は返品も多かったそうだが、会のメンバーが努力した結果、倉敷民藝館の他にも、岡山の天満屋民芸品コーナーや倉敷の民芸店にも品物を置かれるようになった。平成2(1990)年には、「倉敷手まり会」として正式に発足した。

平成5(1993)年、「倉敷手まり会」のきっかけとなった「暮らしの中の民藝」教室は、外村の逝去後、数回続いた後に自然消滅した。この時、外村に教えられた手まりを作り続け、その教えを守ろうと手まり会メンバーが一丸となって奮闘した。現在では、彼女達の作る手まりは「倉敷手まり」と呼ばれ、倉敷を代表する民芸品のひとつにまでなっている。現在メンバーの数は9名前後であり、外村の指導を守りながら、まり作りを続けている。

彼女達が「倉敷手まり」製作の際に手本にした肥後まりは、元々熊本県の女性達によって作られていたものである。熊本の工芸品のうちでも、外村が肥後まりの製作を奨めたことの一つの理由としては、それが女性の仕事と外村に認識されていたと考えられる。しかし、それが「倉敷手まり」と名付けられて、地域の人々や民藝館を訪れる観光客に好まれるようになると思像がされていたかどうかは、疑問に感じるところである。

2-3. 職人となった女性達

次に、第2章2節にて取り上げた「倉敷本染手織研究所」について、外村が実際にどのような指導を行い、研究生達に何を望んだかを考察したい。そのためこの章では、卒業生であるSさん(1932生)、Tさん(1943生)、Oさん(1955生)に伺った話をいくつかのトピックに分けて記していく。彼女たちは岡山県に生まれ、現在も岡山県倉敷市に在住している³⁾。

(a)「倉敷本染手織研究所」への入所のいきさつ

Sさんは、昭和20年代後半、偶然訪れた倉敷民藝館で「倉敷本染手織研究所」の募集を見つけた。これをきっかけに機織に興味を持ち、昭和29年(1954)年、22歳の時に「倉敷本染手織研究所」の第2期生として入所した。

Tさんは、倉敷民藝館に初めて足を運んだ際、展示室の隅に機が置いてあるのを目にした。それは、「倉敷本染手織研究所」の研究生が実演のために使う機だった。この機を見て研究所の存在を知ったTさんは、自らも機織をしたいと思入所を希望した。その時Tさんは高校生で、論文試験を受けたものの、入所は5年待ちの状況だった。その間Tさんは大学の衣装科に進学し、染織を学んだ後に、昭和40(1965)年、第13期生として22歳の時に入所した。

Oさんは、幼少時から倉敷民藝館の近くに住んでおり、小学校の時から倉敷民藝館と「倉敷本染手織研究所」の存在は知っていた。テレビで放送された研究所の様子を見て、心惹かれたOさんは、小学生の時から入所を志した。そして、中学校に上がり研究所を訪ね、短大を卒業してから、昭和52(1977)年、22歳の時に第25期生として入所した。

(b) 技術と思想を伝える

研究生の在籍期間は1年間である。朝は8時半から始まり夕方5時まで、機織の指導や外村の講義を受けるなどする。最初は平織りや、徐々に着尺や帯などを練習していく。それに並行して、ノッティング機を使った敷物の織り方を習得していく。他にも、夏には麻、冬にはマフラーと、季節により様々な物を作る。糸の巻き取り方、整糸の仕方などは最初のうちに順番に教えられる。これらの実技指導のほとんどは、妻である清子婦人が担っていた。生活の中で使うものは自分で作るのが基本だったため、Tさんは最初に、1年間の研究所での生活で自分が使うエプロンを作ったそうだ。

一方、外村が行ったのは、ノッティングという敷物の織り方の指導や、柳宗悦の『工藝文化』を元にした講義だった。Tさんによれば、講義では焼物を作っている様子やヨーロッパなどの海外の写真をスライドで見せることもあったようである。Sさんは、「服飾美の成立」と題された講義を受けた。

また外村は、織物の見学に研究生達をよく連れて行ったようである。Sさんは、この研究所の旅行で、上田の紬、宮崎の緋などを見ることができたそうである。Tさんは、昭和60年代の沖縄旅行で、竹富島を訪問した。そこで3ヶ月間竹富島に住み込みで滞在し、現地の女性と共に機織の勉強をした。

(c) 職人を育てる

外村は、研究生に対して品物を作る際、個性を出さないよう厳しく指導した。Tさんは外村から、「個性とは、家に帰ったら自然に出るもの。同じ図案でも色を変えたらそれはその人のものになり、自分のものは自然に出てくる」と説かれたと語る。さらに、研究生

が作品展などへ出品する事を、入選すれば喜ぶものの、あまり良くは思っていなかったようである。

しかし、外村は研究生が卒業する際に「風雪一丹青万」という言葉を贈る。この言葉は、外村の著書である『続民藝遍歴』の中で、外村自身により「冬の園は同じ風雪に包まれるけれども、春になると草木は、丹青おのずからことなる天性を現わす」[外村 1974:107]と記されている。実際に卒業時にこの言葉を贈られたOさんは、この言葉の意味を次のように説明してくれた。「1年間の季節で例えれば、風や雪の中、皆同じような条件で過ごしたとしても、春になれば、草木がそれぞれの花を咲かせます。それと同様に、研究所で皆同じように学んだとしても、外へ出るとそれぞれの品物ができるのです」。

外村は、このような仕事の姿勢に関することの他、日常の礼儀作法や暮らしについても厳しく指導した。例えば、物を粗末にしたら、厳しく叱り、残った糸は纏めてまた他で使用するように伝えた。Oさんによると、外村は研究生達が機を織っている際、彼女達になぜ機場にゴミ箱を置いているのかを聞いた。そして、外村はいかにくず糸を出さないように織るかを考えるように指導したという。この経験から、Oさんは機織の場合だけではなく、料理の際や他の日常生活においても、いかに無駄を無くすか考えるようになったとのことである。

(d) 卒業後から現在までの様子

Sさん、Tさん、Oさんは卒業してから現在もそれぞれ機織りを続けている。Sさんは卒業後様々な展覧会へ出品し、品物の販売も行っている。Tさんは、現在はノッティングのみを織っているが、毎日の暮らしの中で機織の事を常に考えているという。Oさんも現在も織物を続けており、それを販売している。

「倉敷本染手織研究所」は、第1章にて記述した、倉敷民藝館の事業の一つである。「ホ、工藝伝習所、圖案指導所等の開設」に該当する活動と言えるだろう。しかし、ただ工芸などの指導施設を設けるだけではなく、なぜわざわざ住み込み形式の施設にしたのだろうか。それはつまり、民芸運動が、従来までの生活の変革を目指していた部分と密接に関係していると言える。

おわりに

民芸運動の機関誌でもある『月刊民藝』『民藝』を見ても分かるように、民芸運動の中心部から女性達は、教育の対象として見られていたと考えられる。特に、女性達の服装へ

の言及は厳しく、様々な方面から批判的な意見が寄せられていた。この状態は、雑誌が発刊された当時の時代背景を踏まえた上で、なぜこのような言説が横行することになったのか、今後より詳しく調査すべき部分である。しかし、初めはそうした視点から見られていた女性達ではあるが、戦後以降には様相が変わってくる。その最たるものの一つが、岡山県下で外村吉之介の指導を受けた女性達である。

外村吉之介が、民芸運動の中心部と関わりを持つ運動家であることから、伝える側の外村が女性達を教育者的な眼差しで見ていることは否めず、それも当然のことと言える。しかし、彼の取り組みで特徴的なことは、その多くが実践的な活動だったことだ。外村が講師となった教室において、参加者たちは決して聴衆に徹するだけでは無かった。例えば、今回例に挙げた「民藝女性教室」などがそうである。こうした外村によって展開された場は、実際に物と触れあう機会でもあったのである。つまり、「民藝女性教室」、「民藝夏期学校」などの目的の一つには、人と物を結び合わせることもあったのではないかと考えられる。

さらに、外村は決して彼女達を、金銭を得ることを第一目的とした職人として育てるつもりは無かった。あくまでも、彼女達の染織の仕事は、家庭の中の生活を豊かにするためのものとして望んでいた。研究所の卒業生らによる、「倉敷本染手織会」を結成し卒業後の流通ルートを確認する他、展示会や即売会を行い彼女達の商品を販売した目的は、仕事への向上心を養うためだったようである。しかし、フィールドワークで伺った話によると、上記の事柄を踏まえた上で、外村は彼女達の機織りの仕事を趣味やお稽古事などと同列に認識することを許さなかったようだ。つまり、外村が彼女達に求めた製作のレベルは、自活や自立ができる程のものではなく、家庭の中に行われるものとしながらも、趣味や手芸以上の完成度というものだった。さらに、今回私が話をうかがった女性達は、驚くほど強く自分達は「職人」であるという自覚を持ち、それぞれの染織品の製作を「仕事」と呼んで取り組んでいた。

つまりそこには、趣味のお稽古事とは一線を画すという意味で、外村が彼女達に願った理想が、「職人」や「仕事」という言葉に投影されているのではないかと考える。「職人」、「仕事」とは、柳が提唱した民芸のスローガンの一つである、「無名(銘)の職人」と、「無名(銘)の職人」の「手仕事で作られること」、「実用の品物であること」などにあたる。しかし、外村があくまでも家庭の中を領域と考えていたのは、ほかならぬ彼女達が「女性」であったためだと考えられる。

現在、外村のもとを巣立った女性達の中には、ごく少数ではあるが自ら展示会などを行うなどしている女性がいる。自立出来るほどの金銭的収入こそ無いものの、これは外村の

想定を超えた展開であると考えられる。家庭の仕事に従事する事が一般的であった女性達は、外村により行われた民芸運動により、民芸という思想を得るだけでなく、新たな仕事と活躍の場を手にして、さらに自分達でその領域を広げている。つまり、本稿にて取り上げた女性達は、外村の伝えた民芸の思想や理想と、それぞれの形で付き合いながら現在も機を織り続けている。

こうした女性達の存在が、民芸運動および研究史において、取り扱われることが少なかったことは重要な問題点である。本稿では、私の力足らずなために、すべての疑問点を解消する事ができず、再度考え直さねばならない部分も多く残してしまった。したがって、今後も引き続き、民芸運動に関わった女性達の姿を追いかけていきたい。

注

- 1) 昭和 23(1928)年発行のちらしによる。
- 2) 2010年 11月 29日、岡山県倉敷市 Hさん宅にて聞き取りを行った。
- 3) 2010年 10月 22日、23日、24日、岡山県倉敷市の各自宅に伺い聞き取りを行った。

参考文献

- 宇賀田達雄 2006 『日本民藝協会の七十年』
- 大月一清 1933 「外村吉之介年譜」『民藝』486号
- 大澤美樹子・清水明子・原聖 2006 「民藝運動と女子美術大学工芸科」『女子美術大学研究紀要』36号
- 岡山県民藝協会編(各著者名の記載は無し)
- 1947 『山陽民藝』2 1947号
- 1949 「倉敷民藝館から」『山陽民藝』10号
- 1953 「手織傳習案内」『山陽民藝』20号
- 1971 「倉敷民芸館の改築完成」『山陽民藝』87号
- 1972 「倉敷民芸館の新館の陳列」『山陽民芸』89号
- 金光章 2006 「岡山民藝協会の六〇年」『民藝』648号
- 金谷美和 1996 「文化の消費—日本民芸運動の展示をめぐる—」『人文学報』77号
- 神田健次 2001 「機織る伝道師—外村吉之介論」『神学研究』48号
- 小池静子 2009 『柳宗悦を支えて—声楽と民藝の母・柳兼子の生涯』現代書館
- 高仁淑 2004 「柳兼子の公演活動と朝鮮における民芸運動」『九州大学大学院教育研究

紀要』50号

- 寿岳しづ・寿岳文章・式場隆三郎 1939 「民藝を語る」『月刊民藝』5号
- 寿岳しづ 1939 「髪かたち」『月刊民藝』6号
- 鈴木たけよ 1941 「民藝館たより」『月刊民藝』25号
- 瀬底恒子 1944 「此の頃の民藝館」『民藝』66号
- 高田統子 2006 「岡山民藝協会の草創」『民藝』648号
- 田川きよ子 1939 「生活者の立場と民藝品」『月刊民藝』7号
- 竹中均 1999 『柳宗悦・民藝・社会理論—カルチュラルスタディーズの試み』 明石書店
- 辻野純徳 1933 「外村先生と倉敷の町並」『民藝』486号
- 鶴見俊輔 1976 『柳宗悦』 平凡社
- 外村吉之介 1969 『民芸遍歴』 朝日新聞社
- 1974 『続民芸遍歴』 朝日新聞社
- 1980 『日々美の喜び』 講談社
- 1988 『喜びの美・亡びの美—民藝六十年』 講談社
- 1989 『民衆的工芸品の特性 民藝館の仕事』 倉敷民藝館
- 2009 「世にも美しく純粋な姿」『民藝』675号
- 中村精 1942 「婦人と工芸研究—女学校の工芸を中心として—」『民藝』33号
- 日本民藝協会 2006 「岡山民藝協会六〇年の年譜」『民藝』648号
- 「民藝協会の歩み 民藝協会史略年譜」<http://www.nihon-mingeikyukai.jp/society/yearbook.html> (2012.1.15 閲覧)
- 2008 『復刻版『月刊民藝・民藝』解説・総目次・索引』 不二出版
- 濱田琢司 2006 『民芸運動と地域文化 民陶産地の文化地理学』 思文閣出版
- 藤田慎一郎 1933 「外村吉之介さんへの回想」『民藝』486号
- 松井健 2005 『柳宗悦と民藝の現在』 吉川弘文館
- 水尾比呂志 2004 『評伝柳宗悦』 筑摩書房
- 水尾比呂志・外村吉之介・他 1978 「座談会 日本民藝青年夏期学校の諸問題」『民藝』311号
- 棟方志功、柳宗悦ほか 1940 「民藝一夕話」『月刊民藝』16号
- 森田真也 1997 「観光と「伝統文化」の意識化—沖縄竹富島の事例から—」『日本民俗学』209号
- 森永卓郎監修 2008 『物価の文化史事典』 展望社

- 柳兼子 1940 「民藝一夕話」『月刊民藝』16号
柳宗悦 1984 『民藝四十年』 岩波書店
—— 1985 『工藝文化』 岩波書店
柳八重子 1942 「民藝館たより」『民藝』37号
柳悦孝 1939 「現代の女の服装と国民服」『月刊民藝』7号
安井昭夫 2008 「倉敷民藝館六十周年にあたって」『民藝』670号
三宅登志男 2008 「倉敷民藝館開設のころと外村吉之介」『民藝』670号